

## 第13回花の国づくり共励会（平成15年度） 花き技術・経営コンクール審査講評

平成16年 3月 24日  
審査委員長 今西英雄

第13回花の国づくり共励会花き技術・経営コンクールには、花の国づくり都道府県協議会の推薦がありました経営体を対象とし、審査は、6名の審査委員により、提出された書類に基づく第1次審査と現地での第2次審査を通して厳正に行われ、別表の通り受賞者名簿が作成されました。

本共励会の最高賞である農林水産大臣賞には、次の2点が選ばれました。

徳島県徳島市の岸本昇・ときこ氏は、昭和49年頃からハイビスカスの栽培を手探りで始めたのをきっかけに、この花の鮮明な色に魅せられ、その鉢花生産に取り組んできた。現在は、ハイビスカス、ポインセチア、木村四季咲きクチナシ、初雪カズラなど1.6ha強の栽培規模で、平成14年には合計17万鉢を出荷し、生産額は6,350万円という大規模鉢物経営を行っている。主体は、ハイビスカスで年間12.5万鉢を生産し、生産額は5,000万円に達する。ときこ夫人が考案した独特の芽欠き技術によりピンチされたハイビスカスの鉢物は、分枝が多く、花数が多いため、市場や小売店から高く評価されている。また、社員の中から谷京子氏を抜擢し取締役社長に据えて経理全般と労務管理を任せ、栽培技術にたけた夫妻は、栽培管理に集中するという合理的な役割分担の経営形態をとっている。こうして、家族経営から脱却し、規模拡大と品質維持を図り、所得率と収益の極めて高い経営を確立している点は、高く評価される。更に、昇氏は、徳島県の鉢花生産組合の初代の組合長として、徳島県の鉢花の栽培技術の向上と平準化に努めるとともに、最近では、指導農業士として後進の技術指導に当たるなど、地域農業の発展にも貢献している。

鹿児島県薩摩郡鶴田町の南原武博氏は、昭和63年にハウス660m<sup>2</sup>にジャスミンの切花を導入して営農を開始し、その後ハウスを4,000m<sup>2</sup>に拡大し、平成元年に（有）南原農園を設立した。その当時の代表は、父の武志氏であったが、平成12年に父から代表を受け継いだ。この間、平成5年から計画的に規模拡大を進め、現在の経営は、プライダル需要のアイビー、アスパラガスの葉物にジャスミン、ユーチャリスの花物を組み合わせた1.4haの施設栽培で、売上高は1億数千万円に達する大規模経営体である。父から経営を引き継いだ後、どんぶり勘定の家族経営から、収支を数字で明確にし、家計と事業を完全に区別した家族的企業経営を短期間に確立して

いる弱冠 37 才の経営者である。栽培面におけるパッドアシドファン方式や地中冷水管配置によるアイビー、アスパラガスの夏期の高品質・安定生産、ユーチャリスには地中冷却・加温装置の設置による周年生産をめざす工夫、機械化できるところは機械化を図った省力化の成功、更に、ブライダル花材であることから、迅速な出荷体制を整え、全国の市場からの注文に空輸で応じる販売面での努力が、高く評価される。

生産局長賞に選ばれた岐阜県揖斐郡大野町の白木和彦・ふさ子氏は、タイに直営農場を設置してバンダのリレー栽培に取り組み、バンダを吊り下げた下に観葉植物を栽培し、露地では植木を栽培するという多角経営を行っている点が、評価される。

同じく生産局長賞の佐賀県鹿島市の宮崎憲治氏は、スイートピーを主体にキク、ユリを組み合わせた経営で、スイートピーのビニルハウスでの低コスト生産技術の確立やオリジナル品種の育成などが、評価される。

以上のほか、日本花普及センター会長賞の 4 経営体の方々も、いずれも高い技術に基づいた経営者能力を発揮して安定した経営を行っており、高く評価される。

受賞者の皆様には心からお祝いを申し上げますとともに、今後ともわが国の花き産業の発展のためご尽力下さるようお願いし、審査講評といたします。

第13回花の国づくり共励会  
花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

【農林水産大臣賞】

- ◎ 有限会社 岸本農園  
岸本 昇 57歳・岸本ときこ 55歳(ハビスカス、ポインセチア、クちなし、襦袢紙薄)  
〒771-4263 徳島県徳島市
- ◎ 有限会社 南原農園  
代表取締役 南原 武博 37歳(ジャスミン、アビチ、アスパラガス、ユチャリス)  
〒895-2104 鹿児島県薩摩郡

【農林水産省生産局長賞】

- ◎ 有限会社 白木園芸  
白木 和彦 57歳・白木ふさ子 56歳(レッドロビン、ユキアザミ類、花梨、ハンダ、ドラセナ、観葉植物類)  
〒501-0555 岐阜県揖斐郡大野町公郷 2563-1
- ◎ 宮崎 憲治 54歳(スイートピー、きく、ゆり)  
〒849-1301 佐賀県鹿島市

【(財)日本花普及センター会長賞】

- ◎ JAひだ花卉出荷組合益田支部 代表 中川 剛 63歳(カ、トルコギキョウ)  
〒509-2506 岐阜県益田郡
- ◎ 山田 則明 57歳(丸葉ユカ、千日紅、べにあおい、カネシオン、ハイブリッドスターチス)  
〒444-0426 愛知県幡豆郡
- ◎ 緒方 久幸 55歳(ガーベラ、ユリ)  
〒834-0123 福岡県八女郡
- ◎ 西海菊出荷組合 代表 川内通良 56歳(きく)  
〒859-3237 長崎県佐世保市

## 【農林水産大臣賞受賞理由】

### (有) 岸本農園 岸本昇・岸本ときこ 徳島県徳島市

徳島県徳島市の岸本昇・ときこ氏は、昭和 49 年頃からハイビスカスの栽培を手探りで始めたのをきっかけに、この花の鮮やかな色に魅せられ、その鉢花生産に取り組んできた。現在は、ハイビスカス、ポインセチア、木村四季咲きクチナシ、初雪カズラなど 1.6ha 強の栽培規模で、平成 14 年には合計 17 万鉢を出荷し、生産額は 6,350 万円という大規模鉢物経営を行っている。主体は、ハイビスカスで年間 12.5 万鉢を生産し、生産額は 5,000 万円に達する。ときこ夫人が考案した独特の芽欠き技術によりピンチされたハイビスカスの鉢物は、分枝が多く、花数が多いため、市場や小売店から高く評価されている。また、社員の中から谷 京子氏を抜擢し取締役社長に据えて経理全般と労務管理を任せ、栽培技術にたけた夫妻は、栽培管理に集中するという合理的な役割分担の経営形態をとっている。こうして、家族経営から脱却し、規模拡大と品質維持を図り、所得率と収益の極めて高い経営を確立している点は、高く評価される。更に、昇氏は、徳島県の鉢花生産組合の初代組合長として、徳島県の鉢花の栽培技術の向上と平準化に努めるとともに、最近では、指導農業士として後進の技術指導に当たるなど、地域農業の発展にも貢献している。

### (有)南原農園 代表取締役 南原 武博 鹿児島県薩摩郡

鹿児島県鶴田町の南原武博氏は、昭和 63 年にハウス 660 m<sup>2</sup>にジャスミンの切花を導入して営農を開始し、その後、ハウスを4,000m<sup>2</sup>に拡大し、平成元年に(有)南原農園を設立した。その当時の代表は、父の武志氏であったが、平成12年に父から代表を受け継いだ。この間、平成5年から計画的に規模拡大を進め、現在の経営は、ブライダル需要のアイビー、アスパラガスの葉物にジャスミン、ユーチャリスの花物を組み合わせた1.4haの施設栽培で、売上高は1億数千万円に達する大規模経営体である。父から経営を引き継いだ後、どんぶり勘定の家族経営から、収支を数字で明確にし、家計と事業を完全に区別した家族的企業経営を短期間に確立している弱冠37歳の経営者である。

栽培面におけるパッドアンドファン方式や地中冷水管配置によるアイビー、アスパラガスの夏期の高品質、安定生産、ユーチャリスには地中冷却・加温装置の設置による周年生産を目指す工夫、機械化できるところは機械化を図った省力化の成功、更に、ブライダル花材であることから、迅速な出荷体制を整え、全国の市場からの注文に空輸で応じる販売面での努力が、高く評価される。

## 【農林水産省生産局長賞受賞理由】

### (有) 白木園芸 白木和彦・白木ふさ子 岐阜県揖斐郡:

岐阜県大野町の白木和彦・ふさ子氏は、昭和46年にバラ苗生産を、昭和48年にはサボテン栽培を開始し海外への輸出を行った。また、海外農業視察を通じて、海外とのリレー農業を考案するなど、常に国際的視野に立って経営を行っている。

洋ラン栽培においては、単に、海外からの輸入ということだけでなく、平成元年にはタイに直営農場を設置し、きめ細かく日本での消費者ニーズに合わせた効率の良い経営が可能となっている。すべて直営というのではなく、メリクロン技術やプラスチック苗生産といった高度な特殊技術が必要とされる分野については、専門の技術力の強い現地業者に委託するなどコスト面・効率面も良く考慮されている。

それに加えて、観葉植物栽培、露地をフルに利用した植木類をも栽培する極めてマルチな経営も評価され、多品目経営を行うことで、販売単価の変動に対するリスクを回避し、経営安定に努めている。施設はあくまでバンダを中心に行っているが、バンダの下のベンチにはドラセナなどの効率よく栽培できる観葉植物を栽培している点が、評価できる。また、栽培品目もバンダ、観葉植物等もミリオンハートやカンガルーポケットなどの自社オリジナル品目を他に先駆けて導入して有利販売を行っている。更に、輸出を行った実績もあり、今後、海外への展開も十分期待される。

このように白木氏は、国際感覚と経営感覚に優れ、道徳面での教育活動にも熱心であり地域社会に対する貢献度も極めて高い。ふさ子氏も、揖斐地域における寄せ植え華道のリーダー的役割を担っており、生産者として有利性を生かすとともに、消費者の生の声を生産にフィードバックしており、経営の好アシスタントを行っている点も、評価される。

### 宮崎憲治 佐賀県鹿島市

佐賀県鹿島市の宮崎憲治氏は、昭和43年の就農当時は、水稻と野菜の複合経営に取り組んでいたが、夫人が花き栽培に興味を持っていたことがきっかけとなり、夫婦できくの先進地へ通いながら栽培技術を学び、きく栽培を開始した。昭和56年には、スイートピーを導入し、組合のメンバーとともに品質向上のための研究を重ねた。経営面では、徹底したコスト管理と雇用の活用による大規模経営を確立しているほか、生花店経営を開始し、そこで得られた消費者ニーズ情報を生産に活かすなど、生産から販売まで一体的な取り組みをしている。

また、栽培面では、佐賀県でのスイートピー栽培の先駆けとして、技術確立に尽力されたほか、現在は、良質たい肥の大量施用による土づくりの徹底や、耕種的防除法の活用による農薬散布回数の削減など環境に配慮した生産にも努めている。

更に、特徴的な取り組みとして、オリジナル品種の育成に早くから取り組み、経済性と市場性に優れた品種の育成により、実需者から高い評価を受けている。

その他、県内花き生産者のリーダー的存在であり、地元の花市場の生産組合長を平成6年から6年間務めたほか、平成11年からは県の生産団体連合会の会長を務めており、県産花きの生産拡大・品質向上に尽力している等の面で、高く評価される。

### 【(財)日本花普及センター会長賞受賞理由】

#### J Aひだ花卉出荷組合益田支部 代表 中川 剛 岐阜県益田郡

J Aひだ花卉出荷組合益田支部の位置する益田郡の夏秋ギクは、長い間岐阜県を代表する切花として位置づけられてきた。近年では、バラ、トルコギキョウ等の洋花が全国的に拡大され、キク生産は減少傾向にあるが、40年以上前に先達として切花産地を築かれた萩原町桜洞地区を中心とした益田地域の切花産地づくりの精神が県下の切花産地に受け継がれている。

昭和40年代当初情報の極めて少ない状況の中で、立地条件に恵まれていない中山間地の狭隘な農地を活用して農家収入を確保するため、先進的農家が夏秋ギクに着目され、暗中模索の中、牛歩の如く産地づくりを進められたことは、先達として評価されている。

露地栽培として始まり20年以上に亘り栽培されてきたが、昭和60年頃からの圃場整備を機会に岐阜県高冷地野菜で開発された雨よけ栽培方式の夏秋ギク栽培への導入が急速に進められ、これを機会に生産安定が一段と図られるとともに、生産物の農協への一元集荷・販売体制が確立された。

消費者ニーズの変化を的確に研究する中から、キクからトルコギキョウ等の洋花への品目転換がなされ、組織も農協合併などに伴い再編されたが、土づくり、栽培技術、調整出荷技術など長い歴史の中で培われた高い意識と技術は、自助努力で切り開かれ、高品質切花生産が続けられていることが、評価される。

#### 山 田 則 明 愛知県幡豆郡

愛知県一色町の山田則明氏は、昭和50年に当地域ではいち早くスプレーカーネーションを導入するとともに、育種技術にも力を入れ、耐暑性に優れたオリジナル品種を育成し、現在「ホワイトラブ」「ピンクラブ」と「ラブ」シリーズとして各市場へ出荷されており「やまちゃんのカーネーション」のブランドで定着している。

また、カーネーションと他の切花（ハイブリットスターチス）を組み合わせることで労力の軽減と出荷時期の拡大に努めているほか、管理がさほど必要とせず、枝物としての需要があるユーカリや実物として有望なベニアオイ（ハイビスカス）を導入し露地の利活用を進めており、夏場の収入確保と生産経費節減に努めている。こうした露地の活用は、夏場に収入がないカーネーション経営にとって魅力的なものであり、周囲の生産者への模範となっている。

労働軽減について工夫した点では、ピートモスベンチ栽培導入により畝立て作業が軽減され、また、定植位置が地表面から約30cm程度高くなるため、腰をかがめる辛い姿勢の定植作業から解放され、作業がスムーズに行われ作業時間の短縮につながっている。

環境保全について配慮したことは、土壌消毒を蒸気ボイラーによる蒸気消毒を実施し、

クロールピクリンなどの化学薬品の使用を削減している。ピートモスベンチ栽培における灌水は、点滴チューブを使用し、灌水量、施肥量の削減に努めている。

氏は、農業経営士に認定されており、地域の農業のリーダーとして活躍している他、地域における各種行事への参加、協賛を通じて地域社会へ貢献していること等も、評価される。

## 緒方久幸 福岡県八女郡

福岡県広川町の緒方久幸氏は、昭和42年に地元農協に就職し野菜の技術指導、企画開発部門を担当していたが、平成4年に新規就農し、地域でまだ事例がなかったガーベラの養液土耕栽培等の新技術に率先して取り組み、技術の確立を図り、ガーベラの専業経営となっている。

また、JAふくおか八女花き部会ガーベラ部内で、収量・収益ともに常にトップレベルを維持する一方、生産委員長として地域の栽培技術の指導を行うなど、ガーベラ農家の模範として、地域の花き振興に果たした役割は大きい。

更に、地域の花き部会長であった平成9年に、ガーベラの調整作業の労力軽減のため、地域でパッキングセンターを設立することを呼びかけ、約一年間かけて生産者を説得し、設立にこぎつけた。これによって、地域で労力負担が軽減し、ガーベラの栽培面積を増加することができた。

このように、広川町のガーベラ農家の労働環境改善及び生産規模拡大に果たした役割は大きく、これらの面で評価される。

## 西海菊出荷組合 代表 川内 通良 長崎県佐世保市

長崎県佐世保市の西海菊出荷組合は、昭和55年に設立し、栽培農家数9戸、平均年齢55歳の専業農家で構成している。組合設立当時、県内の市況が低迷したため、個人のみだけでは限界を感じ、栽培技術の統一と信頼される商品づくりとブランド化をいち早く目指し、「西海菊」の名称で神戸市場に出荷を始め、このことが他の花き産地に影響を及ぼし、カーネーション等地域の花き新団地形成に寄与している。

組合では、技術検討会等を適期に開催することで、栽培技術の高度平準化を図るとともに、JAとの協力で販売対策を行い、高い品質で評価を受けている。

栽培技術面では県農業試験場で選抜した優良系統の試験栽培、労働改善の面では、高設育苗による腰痛対策、省力化のための直挿し、不耕起栽培を導入している。更に、労働力の面では、地域授産施設との連携による作業委託等で雇用を創出し、地域経済・福祉に寄与していることなどが、評価される。

また、環境保全の面では、土壌分析、肥効調節肥料の施用により過剰施肥を防止している。

なお、組合員9名中、8名が認定農業者であり、地域農業の担い手としても日々活躍している。